

千刈狸の呟き

～ コミュニケーション手段としての文字文化 ～

「呟き」と言えば最近「ツイッター」という「ブログ」とも「メール」とも異なり、パソコンを利用してユーザーが140文字以内で「呟き」を投稿することでコミュニケーションするサービスらしい。「呟き」と言うと小声で独り言をいう意味だが、ツイッターとなるとそのようなイメージはなくなる。

ノムさんのぼやきに似たような私の呟きを聞いてください。「ガリ版刷り」は最近見たことがない。小学生の頃担任の先生の手伝い?と称して、放課後原紙切りをした記憶がある。真黒なインクを体のあちこちに付けながら皆でわいわい結構楽しんでやっていた。鉄筆への力入れかたにコツがあって、下手をすると原紙が破れ非常に困ったものだが、修復する方法はあった筈だが、何故か今は思い出せない。原紙一枚から何枚位の謄写版が刷れたのだろうか、当時のークラスは50数人から構成されていたので、その位は裕に謄写できた。この謄写版の技術は昭和40年頃大学の部活で夏期合宿の菜とか、東日本医科学生総合体育大会の時のスケジュール作りとか、対外試合時の対戦成績の結果報告書にも活用した。タイプライターも最近見かけることがない。一番記憶に残っているのは、留学から帰ってきた医局の先輩が、手術を終わって研究室に帰ってきてすぐ手術所見をタイプライターでタイプしている時の音である。パチパチパチパチ、チン、ズー、パチパチは勿論アルファベット文字をヒットする音で、チンは行の最後の文字を打ち終わったことを知らせる音である。ズーは改行する時のレバー操作の時の音である。これらが心地よいリズムを奏でていた。和文タイプライターもあったが、私にはあまりなじみがなかった。英文タイプライターとメカニズムも全く異なり、その操作音はお世辞にもリズムカルには聞こえなかった。私が英文タイプを初めて使い始めたのは大学で研究論文を書く時にアブストラクトや引用英文文献の個所で使用したものである。

学会発表のスタイルも昔とは様変わりした。

私が医者になりたての頃昭和40年代前半の頃、秋田県農村医学会では模造紙にマジックインクで手書きしたものを重ね張りしておき、講演の進み具合に従って、一枚ずつ下へ引っ張り落していた

のをおぼえている。間もなくプロジェクターを使ったプレゼンテーションに変わったが、スライド原稿作成には苦労した記憶がある。地方会などの小規模学会の時はレタリングセットを使って自分で作成した。勿論今のようにカラフルなスライドではなく、青・白二色のスライドのことが多かった。それでも全国学会の時は、活版印刷屋さんへ数週間も前からスライド原稿を持ち込み、校正を繰り返して仕上げたものである。

今では謄写版、タイプライターに代わって便利な?パソコンがその仕事を代行している。パソコンは文字文化に革命をもたらした。昔懐かし友人からもらう手書きの手紙や年賀状はその人をイメージさせるのに十分な癖字は懐かしさがこみ上げてくる。その人しか書けない筆跡があり、筆跡鑑定にまで利用されている。携帯電話やパソコンでのメールは決まり切った文字スタイルのことが多く、味気ない。しかし便利なことは認めざるを得ない。アメリカに住んでいる姪にさえ瞬時にして手紙が届くようなものである。添付文書に書類とか図表まで一緒に送れる。最近気になっていることがある・学童たちとのメールとかブログで特定の人を誹謗・中傷したことが原因となって自殺事件にまで発展することである。

面と向かって言えないことでもこれら電子機器を利用すればさほど抵抗なく表現できるのだろうか。また現代の児童・生徒は対面で人と接するのが苦手と言われている。最近の新聞の読者欄で読んだのだが、通信制の高校生の学習のサポートをしている人(先生?)が、誰かに気づいてもらいたくて発信し続ける心の動きを見逃さないように、彼らの素顔がのぞけるブログをこまめに見るようにしており、そうすることによって社会へ巣立ってから生身の人間とのコミュニケーションが出来るように努めているとのことである。電子機器も使いようによって非難されずにむしろ推奨されることになる。

現存する日本最古の文書「日本書紀」の保存性には驚嘆せざるをえない。現代の電子機器がはたして保存性の点で「日本書紀」を凌げるだろうか?現代に生きる我々は文明の利器の長所・欠点をよくわきまえたうえで使いこなしていくしかあるまい。

シンパイ狸